特別寄稿

順天堂大学医療看護学部　医療看護研究18
P.1－11(2016)

M-GTAの基本特性と分析方法
―質的研究の可能性を確認する―

Basic Characteristics of M-GTA and its Analytical Process：
Renewing Possibilities of Qualitative Research

木　下　康　仁*
KINOSHITA Yasuhito

要　旨

本論文は質的研究が普及定着過程にある現在、その可能性を確認的に検討したものである。とくに、1990年代初めに既存の専門領域を横断する形で独自の領域化を遂げたとされる質的研究の形成背景を踏まえたうえで、時代的には先行していたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）との緊張をはらんだ関係を確認する。そして、オリジナル版GTAの可能性を、未完のままとなっていたグレーザー的部分とストラウス的部分の統合、すなわち、客観主義の立場は取らないがシステマティックなコーディング法は精緻化するという課題と、意味の解釈の重視による深い解釈は継承しつつも分析結果の一般化の可能性を確保するという課題の統合を意図して考案されたM-GTAの分析過程を概略的に述べる。

キーワード：質的研究、新たな可能性、オリジナル版GTA 、M-GTA
Key words：qualitative research, renewed possibilities, original GTA, M-GTA

Ⅰ．はじめに

質的研究が既存の専門領域を横断する形で独自の領域形成をしたのは世界的にみて1990年頃と言われているが、現在ではヒューマンサービス領域を中心に認知され定着してきている。ここに至るプロセスは平坦ではなかったので喜ばしいことではあるが、研究法として認められるようになったことで、評価方法の確立という新たな課題に直面するようになってきた。近年のこうした展開は質的研究の著しい多様性と密接な関係にあり、今再び質的研究の意義と可能性を議論すべきときにきている。

質的研究法には個別の多様な研究法が含まれる。共通項は質的データを活用する点であるが、ベースとなる認識論では社会構成主義、現象学から客観主義まで両極端の幅がみられ、しかも知名度は高いもののGTA（Grounded Theory Approach）のようにそれ自体が多様化しているものもある。もはや数量的研究法に対して質的研究法という単純な対比では十分ではなく、質的研究内部においても相互に批判的検討が必要になっている。質的研究についてのこうした多元的多様性は質的研究を矮小化する内向きのイメージにとらえがちだが、実は逆であって数量的研究と比較したときの質的研究の果たし得る大きな可能性がこの点にあると考えられる。

ここでは、質的研究をめぐる大きな流れを踏まえなぜ質的研究が領域化したのかを確認する。また、主な質的研究法を概観することで、それぞれがどこに焦点をおいているのかを整理する。その上で質的研究の領域化よりもはるかに先行して1960年代に提唱された

＊ 立教大学社会学部
College of Sociology, Rikkyo University

オリジナル版GTA（Glaser and Strauss,1967＝1996）以降のGTAの多様化の系譜を、認識論とコーディング法の観点から検討する。GTAが先行してたどってきた軌跡において、1990年代からの質的研究の領域化の波を受けたオリジナル版はその客観主義的性格が批判されるのであるが、そうした批判を補って余りある可能性がオリジナル版にはある。この点は十分理解されていない。一言でいえば、GTAを論ずることは質的研究全体を論ずることに通ずると言ってよいほど、この方法には多様で革新的な要素が最初から組み込まれていたのである。

M-GTA（Modified/修正版 GTA）はこうした背景を踏まえてオリジナル版GTAを抜本的に再編成し、研究法としての独自の位置づけ、そして、具体的なデータの分析方法までを体系化したものである。M-GTAが最も重視しているのは研究者を研究方法論化する、あるいは、研究者を社会関係にロックするという表現で説明しているように、誰が何を何のために明らかにしようとして行う研究であるのか、また、研究結果をどのように実践活用していけるのかを徹底して意識化することである。

質的研究法は最終的に分析結果を記述によって表現する。分析が終われば簡単に書けるかというと決してそうではなくて、記述は最後の分析といえるぐらいに難しい。その理由の理解も重要なのだが、ここでは省略する（特に、木下、2003、2007、2009を参照）。

Ⅱ．研究活動の基本類型

まず、質的研究の勉強の仕方についてであるが、自分１人で勉強するよりは仲間と一緒に勉強をするのが有効である。自分が理解していることを他の仲間と話し合いながら確実にしていく。話すという行為、他の人がどのように理解しているかを知ること、それにより同じ事柄であっても多様な見方があること、つまり、多角的に検討でき微妙な違いのあることに気づくことができる。この学習プロセスが効果的なのだが、もう一つ重要な理由があり、この経験がいずれ質的データの解釈を行うときに一つの意味だけでなく他の解釈可能性を考えるようになるからである。理論的センシティビティの訓練になるといってもよい。

次に研究活動の全体をおさえておこう。簡単に言うと研究とは「測る」「分かる」「変える」の３タイプに分けることができる。「測る」とは測定するということで、数量的データを使った統計的な解析方法で、客観性重視のいわゆる伝統的科学観に基づく。

それに対して「分かる」というのは、意味の解釈である。人間を中心とした複雑な現象を理解可能な形にする作業で、正解が１つの世界ではないのでより深い意味の解釈が研究の質を規定する。質的データを使って行われる質的研究を特徴付ける調査の方法である。

「測る」と「分かる」に対して、「変える」とは実践を重視した研究のあり方で、何が改善を要する問題であるのかを明確に設定するところから始まる、現状批判的、改革的方法である。したがって、価値的な立場ははっきりしており、アクションリサーチと重なる。

少し補足すると、研究法としてのアクションリサーチを理解するうえで、SSM（Soft Systems Method）という方法が参考になる。もともとはイギリスの経営マネジメントで開発された手法で、日本では大東文化大学の内山研一先生が第一人者である（内山、2007）。経営システムの研究方法として企業で広く採用されており、看護でも看護管理、看護組織の領域で用いられている。

SSMではグループで討議して解決すべき課題を抽出し、それをrich pictureと呼ぶ簡単なイラスト風の絵にまとめる。ここが質的研究法と通ずる興味深い点で、むろん課題は言葉で説明できるのであるが、あえてイラストで表現する。人間の認識の仕方と関係していると考えられるのだが、共通認識を確実にするうえで有効な方法ということであろう。

M-GTAは研究結果の実践的活用を主要特性の一つとしているので、「分かる」→「変える」の方向が重要となる。ただ、通常アクションリサーチというと解決すべき課題を特定し「変える」に直に入っていくわけであるが、それに対してM-GTAでは最初から課題解決型で一貫して進めるのではなく、人間の行動、社会的相互作用にかかわる問い（分析テーマと呼ぶ。後述）を立て、その結果を理論（説明モデル）にまとめ、応用者が言わば羅針盤のようにそれを活用して自身のおかれている現実場面に関わっていく。研究と実践をつなぐこの移行を倫理的にも論理的にも、そして、現実的にも有効にするために【研究する人間】という視点をM-GTAの基軸に据えている。

Ⅲ．質的研究の到達点と新たな課題

質的研究についても昔話ができるようになったことはそれ自体が感慨深いのであるが、20年ほど前は投稿しても「これで研究といえるのか」「すでに知られて

いることしか書いてないのではないか」「そもそもどうしてこの結果になったのか。分析過程がわからない」といった反応が多く、門前払いに遭うのも珍しくはなかった。どの領域であれ初期の投稿者はこうした根本的な批判や疑問に応えつつ途を拓いていったのである。そのぐらい質的研究というものがまだ理解されていなかったわけであるが、同時に、質的研究の側も研究方法として分析過程が体系化できておらず誰にとっても理解可能な形での提示が遅れていた。初期においてGTAが質的研究とほとんど同義と受け止められたのは、この研究方法がデータに立脚した分析から独自の理論を生成する質的研究法として提案され一定の体系だったコーディング方法をもっていたからに他ならない。

現在では、個別には異質で多様な方法をもちながらも、質的研究という領域は定着している。初期のころからは大変な進歩とも言えるが、その結果として深刻な問題が起きていると考えている。質的研究についての基礎的な理解が不十分なままに分析方法だけを学んで質的データの分析を行い、その成果を論文にまとめる傾向である。コーディング方法が体系化されていればいるほど技法として理解しやすく思えるので、取り組みやすく感じてしまうのだが、質的研究の怖さと醍醐味は所定の技法にのっとって分析してもそのことが分析結果の適切さを担保しないということである。言うまでもなく、質的データの意味の解釈を行うのは分析者自身でありコーディング方法はどれほど体系化されたとしてもその作業を代替するのではないからである。数量的分析方法と大きく異なる点であり、M-GTAでは【研究する人間】の概念により研究者自身を分析方法の中に組み込むことで、意識化が欠落しないようにしている。

こうした新たな問題状況は、質的研究論文の指導、評価の確立を要請している。実際は大学院や査読誌で問われてくるのだが、現状では、何を指導し何を評価するのかはまだ十分に確立されているとは言い難い。質的研究が定着されてくる中で質的研究自体の複雑な構成、主要な質的研究方法に限っても認識論的基盤と分析方法の個別な理解があいまいになり、その結果、分析技法を偏重する傾向がみられる。この課題に早急に取り組まないと、質的研究は期待に応えられなくなり一時のブームで終わりそれ自身の可能性を潰していくことになりかねない。逆説的な話だが、質的研究が定着化したことによりそれが何であるのかが問われることになったのである。分析方法の体系化だけでこの状況を乗り越えることはできない。

M-GTAは質的データの分析方法の面で多くの関心を集めていると考えているが、この部分はあくまで氷山の一角であってM-GTAの全体像ではない。例えば、論文の表記で「M-GTAを用いた」と「M-GTAを参考にした」とでは全く意味が異なるのだが、最近は後者、つまり、データの分析方法として使ったというものが多いと感じている。前者であれば、理論（説明モデル）を生成したとなるのだが、そこを目的に分析を行ったというのであればまだ理解できるのだが、「参考にした」という場合はそうではなくデータの分析方法として使ったというのであろう。つまり、目的と手段が分離され手段が目的化するという転倒現象で、これは指導や評価のおける分析方法への比重の偏重と関係しているだけでなく、本来の目的というか、なぜ質的研究であるのか、なぜ理論生成まで行うのかという根本的に重要な点が指導と評価から欠落しかねない。

M-GTAに関しても質的データの分析方法として関心をもつだけでなく質的研究方法論として全体像を理解してもらいたい。目的と手段が【研究する人間】を挟んでどのように構成されているのかがわかると、安心して分析に取り組むことができるだけでなく、大変ではあるが一つの世界を描き出すという質的研究の醍醐味に挑戦したくなるであろう。

Ⅳ．質的研究の習得プロセス

現状をこのようにみてくると、やはり基本に立ち返ることの重要さを再認識する。自分が学習する場合だけでなく、指導する場合にも共通することである。

質的研究の習得プロセスをどう考えるかということだが、学習や指導を始めるに当たりおおざっぱであってもイメージしておくと参考になる。「学ぶ・習う」→「使える」→「教える」の循環と、基礎的力量形成のための「メモ書きの習慣化」である。

まず、「学ぶ・習う」であるが、知識がなければそもそも学習は始まらない。しかし、新しいことを知るということとその内容を理解するとの間には距離があり、しかも研究方法のように実践を伴う場合には実際にしてみることも学習に含まれる。習うに関しては、最初は形から入る、まねてみるということで構わない。言うまでもなく、一回あるいは短期間勉強したらすぐに分析ができるわけではない。

次は、「使える」である。自分の研究で実際に分析

を行うわけだが、「学ぶ・習う」から「使える」までの距離はかなりあると考えた方がよい。使うと使えるの違いである。ここでは分析方法の話なので実技の面が前面にでるが、それだけでなく知識も使えなくてはならない。つまり、専門的な勉強とはその学問分野における様々な概念や理論を学ぶのだが、単に知識として保有できればよいのではなくそうした概念を“使って”現象を理解する、説明するという意味である。

では、「使える」で終わるかというとその先に「教える」がある。修士論文や博士論文、投稿論文が終われば自分の当面の目的は達するのだが、その経験をもとに今度はそれを他の人に教えることが重要となる。教えることは自分の理解の点検になる。

このプロセス全体にわたってカギとなるのが、メモを書くことの習慣化である。質的研究者が全て強調しているといっても過言ではないほど基本的なことである。

Ⅴ．質的研究潮流化とGTA

質的研究が看護・福祉・ソーシャルワークなどのヒューマンサービス領域や、マネジメントやマーケティングなどを含め、既存の領域を横断するかたちで領域形成されたのは、おおむね1980年代の後半から1990年代の始めといわれているのだが、これは２つの性質の異なる潮流が合流するかたちで起きてきたと考えられる。

一方には、高度な数量的方法を使った研究でも現実の問題に対して効果的な結果が得られないという一種の限界認識が共有されてきたこと。そこから人間の複雑さを理解する有効な研究法への模索が始まり、質的研究に関心が向けられる。この文脈で大きな役割を果たしたのがアメリカの看護界で、看護の学問的独自性の確立という大きな課題を前に疾病ではなくて病んでいる人間を理解する方法として質的研究に関心が向けられた。その拠点の一つがUCSF（University of California, San Francisco）で、GTAの生みの親の一人であるAnselm Straussがリーダーであった。彼はまたアメリカ社会学を特徴づける理論的立場であるシンボリック相互作用論の中心人物でもあった。

他方、従来の調査の在り方に対する自己反省的、批判的な立場が主に社会学を中心に提起され、質的研究への流れを形成していく。研究者が圧倒的に優位な立場で行われる研究の在り方に対する反省から、より対等な形での研究の在り方が模索された。この点を理解するには、例えばナラティブ・アプローチにおける共同生成性という概念が参考になる。

医療関係では病の語りの研究として一つの系譜が形成されているが、専門的な研究者によって語られる対象であった人たちが自らの言葉で病の経験を語り始めていくというアプローチの変換をもたらした。当事者の経験は受身形ではなく、当事者自身の言葉で表現されるのが一番自然であるという考え方である。しかし、差別や偏見を受けてきた場合のように自分自身の経験だからといっても実は簡単に語ることは難しいのであり、語り難い経験を語れるために研究者との信頼関係が不可欠である。研究者の役割は当事者が語り難い経験を語れるような関係性をもつことで、したがって、そこで表現されるのはモノローグではなく当事者と研究者との共同行為の産物という性格をおびる。このアプローチから、ハンセン病者あるいは社会的マイノリティとされる人たちの研究が蓄積されている。ヒューマンサービス領域に質的研究の関心が拡大していったのは、こうした考え方と姿勢が共有されたからである。

1990年代初めからの質的研究の領域化の背景はこのようにまとめられるのだが、時代的にはそれよりもはるかに先行する1960年代に実はオリジナル版GTAが提案され、理論生成を目指す質的研究法として広く関心をもたれていった。GTAは質的研究の先駆けといえるのだが、後述するようにそれほど単純な話ではない。そこで、領域形成化に至る二つの流れとオリジナル版GTAの関係、具体的には先行していたGTAは質的研究の領域化とどのように交わっていったのか。GTAからみると乱気流に突入していくようでもあった。この点の理解は、現在、質的研究を理解するためにもGTAを理解するためにも重要なのだが、残念ながら十分議論もされていないし理解もされていない。M-GTAを含め、なぜGTAが多様化したのかもここと関係している。

GTAは質的研究法でありそれで間違いではないのだが、グレーザーとストラウスは「質的研究法」を開発しようとしたわけではなかった。1967年に刊行された『The Discovery of Grounded Theory』という本は、1960年代に彼らがサンフランシスコ周辺の６つの病院をフィールドに死にゆく患者に焦点をおいた研究プロジェクトの副産物であった（木下、1999）。その研究成果の一つが『Awareness of dying』（Glaser and Strauss, 1965＝1988）で、この本は多方面から注目されるのだが、その中にこの結果を導いた研究方法への

関心があり、それを受ける形で書籍にまとめるのをグレーザーが提案したという経緯が彼によって述べられている。オリジナル版GTAはグレーザーが大半を執筆しているだけでなく、GTAの構成も彼によるところが相当に大きいと考えられる。

謎解きのような話になるが、『The Discovery of Grounded Theory』には「Strategies for Qualitative Research（質的研究のための諸戦略）」という副題が付けられており、直接的にはここからGTAが質的研究法と理解されることになったといえる。GTAはデータに密着した分析から理論を生成する質的研究法と説明されているのだが、これは結果であって彼らが意図したのは質的研究法なるものを開発しようとしたわけではなく調査から理論を生成していく方法論の開発だったのである。

この背景として当時、仮説検証的な数量的な研究方法がアメリカ社会学の中で全盛期を迎えているにもかかわらず調査の結果が体系立った理論に結実していかない状況があった。彼らはこれを痛烈に批判し、調査から理論を生成する方法の開発に腐心したのである。その結果、大胆な視点の転換を行う。データの分析から結果を導くのではなく、分析の客観性は維持しつつ結果すなわちグラウンデッド・セオリーを生成することを目的にデータを収集､分析し続けるという方法で、それにかなうデータが質的データだったということである。なぜGTAではデータが柔軟に位置づけられているのか、なぜ分析プロセス全体にわたってデータの収集と分析が推奨されているのかは、すべてこの点と関係しているのである。

グレーザーは今でもGTAは質的データだけを用いる研究法ではなく数量的データも用いると強調しているが、彼の立場からはこれは当然のことであって、理論生成のために必要となるのであれば数量的データを排除する理由はなく、データに対する柔軟性に包括されるだけのことである。グレーザーは一貫して客観主義の立場にたち、質的データの解釈であっても数量的研究と同程度の厳密さを求める。GTAにおいて彼がなぜ独自のコーディング方法の開発にこだわり、技法としての切片化（質的データを、文脈を解体して細かく検討していく技法）を導入したのか。質的研究の領域化の中でオリジナル版GTAがその客観主義的性格を批判されていくのは、これもまた当然なことであったのである。

しかし、GTAはストラウスとの共同提案だったのであり、グレーザー的部分は明快なのだがストラウス的部分が組み込まれることにより客観主義一辺倒と言えない要素がもたらされ、GTAは性格のあいまいさと同時に大きな可能性をもつようになる。質的分析の神髄である意味の解釈への執拗なまでのこだわりと実践である。ストラウスはグレーザーのようにコーディング方法自体の開発にはほとんど関心を示さず、グレーザーの方式に乗りながら実質的作業である意味の解釈にこだわる（木下、2014）。グレーザー的部分だけであればGTAはわかりやすいが単純な方法で、それ以上でも以下でもない。ところが、ストラウス的部分もあることによってGTAは1990年代以降の質的研究の領域化をもたらした二つの異質な潮流を統合しつつ新たな可能性を獲得できるのであり、M-GTAはそのひとつである。したがって、M-GTAにおいてグレーザー的部分とストラス的部分がどのように統合され、かつ、GTAの客観主義的性格に対する批判に応え、質的研究の領域化の中でどこに位置するかをみていくと、M-GTA がGTAの発展系であることが理解できる。また、M-GTAは異質であるグレーザー的部分とストラウス的部分の統合が当事者において未完成のままに終わったことにより誤解と混乱がもたらされている状況の克服も意図している。

Ⅵ. 質的研究と質的データの関係

質的研究が領域化したとはいえ、この中には認識論から具体的な分析方法まで非常に幅のあることを指摘してきた。これ自体が質的研究の重要な特性ではあるが、同時に一人ひとりの研究者が「質的研究とは何か？」という問いに答えをもたなくてはならない状況になっている｡これは簡単そうで難しい問いなのだが、自分の立ち位置を意識することになるので避けるべきではない。取り組んでみると､その意味が実感できる。

質的研究とは何かという問いへの答え方はいろいろありうるが、私は質的データを用いた研究であると考えている。質的研究の位置づけと個別の質的研究方法を連結するには、この視点が最も有効だからである。ただ、数量的研究には数量的データだから質的研究には質的データと思われるかもしれないが、そうではない。一見わかりやすいが、この考え方は従属的定義になるのでほとんど意味をなさない。質的研究は数量的研究に準拠して位置づけられるのではなく、それ自体の独自性、それゆえの必要性があるわけで、したがって、質的データもそれに対応している必要があるから

である。

質的データは形態としては数量的表現ではなく言葉で表現されたものであり、現状ではインタビュー記録（半構成的、フォーカスグループ等）やフィールド調査の観察記録などになるが、重要なことはデータの形態ではなく、なぜこうしたデータが必要であるのかとう問題である。つまり、研究計画上この種のデータが必要であるという独立した論拠を示す必要がある。

質的研究が領域化する際に、複雑な人間をトータルに理解しようとする関心とそれに有効な研究方法を求める動きがヒューマンサービス領域を中心に起きたと指摘したが、様々な問題を抱え援助や支援を受けながらも複雑な現実を生きる人間や他の人々との社会的相互作用を理解するためには、多様性や複雑さをそのままに表現したディテールの豊富な内容がデータとして不可欠である。同時に、先に述べたように日常的経験であってもそうした人々にとって語ることは経験を意味づけることにもなり決して簡単なことではない場合が少なくない。研究者との信頼関係のもとで語れるのであり、先に述べた共同生成的性格をもつ。私たちはそうして得られたものをデータとして外在化し解釈を試みる。したがって、質的データであるということの中に研究の倫理性が組み込まれているのであり、これがM-GTAでいえば、研究結果の実践的活用、現場への還元とつながっていく。

Ⅶ. 質的データの分析とは

次に問題となるのは、こうした質的データをどのように分析したらよいのかである。逐語化されたインタビュー記録を例に考えると、自分も同席しているかのように興味深く読めるものである。しかし、これをどう分析するかとなるとたいていは立ちすくんでしまう。ディテールの豊富さが逆にとっつきにくくする。どの質的研究法もここで苦労しているのだが、誇張して言えばここに誘惑の罠がある。質的データを分析できる明確なコーディング方法に飛びつきたくなる、あるいは、実際に飛びつく。質的研究への関心と質的データ分析方法への関心が、質的研究の特性についての理解が不十分なまま、ともかくも早くデータ分析をしなくてはとなり、それにはどの方法が便利かいうことになってしまう。

先に述べたように、オリジナル版GTAは理論生成を目的としてそのためのコーディング方法を提案していたのであり、それが多くの関心を集めた主要な理由でもあった。そして、質的研究の領域化を受けてオリジナル版を抜本的に再構成したM-GTAは研究者を方法論化する、あるいは、研究者を一貫して社会関係に組み込む、すなわち【研究する人間】の概念により、客観主義に基づかない、そして、より体系化されたコーディング方法を提案している。しかし、コーディング方法はいくら洗練されたとしても所詮車であって運転者がいて用をなすものである。数量的分析は半ば自動運転的であるがそれにしても補助以上ではないが、質的データの分析は、それが意味の解釈である限り、どこまでいっても運転手の存在は必要である。

質的研究法の中にはGTA系のようにコーディング方法を明確に示さず、分析者の自由度を高く設定し、半ばブラックボックス的に組み込んでいる場合があるが、どちらであっても次の点に着目してみればその分析が何をしようとしているのかは理解できるものである。すなわち、データとの最初の接点をみればよい。分析者は最初にデータをどのように扱うのか。少し説明すると、質的データの分析とはデータから離れるところから始まるのであり、そうしなければ分析に入れない。この最初の一歩を注視するということである。個々のインタビュー・データは一つのまとまりとして存在しているのだが、分析とはそこから一歩離れるところから始まる。しかし、質的データの特性としてそれぞれのインタビュー・データは独自の磁場のような力をもっているからそこから離れるためには相当な力が必要となる。コーディング方法はここを助けてくれのであるから、なぜ誘惑の罠になりやすいか理解できよう。しかも、体系だったコーディング方法は最初の一歩だけでなく、その後の分析プロセス全体を制御できるから運転者である自分自身の役割と責任を意識することなくスッと引き寄せられてしまいかねない。

データから離れる最初の一歩に話を戻すと、印刷したインタビュー・データの欄外に気が付いたことをメモ、あるいは、ラベルないしはコードと言ったりするが、を書いていくのが一般的である。この作業に入る前に、データをよく読むとか何度も読むという注意がなされる。よく読むとはどういうことであるのかという点もあるが、データに的確に反応できるようセンシティビティを強化するためである。

こうしてデータ全体が欄外メモに“置き換えられる。”個々のデータの磁場圏を離れて、これから分析軌道に入っていくのだが、離れた後の方が実は難路で多くの質的研究法が分析を促進させるための独自の工

夫を試みている（詳しくは、木下、2014を参照）。

さらに興味深いのは、最初の一歩の離れ方は客観主義に立脚するグレーザー版GTAから社会構成主義にもとづくチャマーズ版GTA（Chamarz, 2006＝2008）だけでなく、現象学的アプローチであってもほぼ同様である（松葉・西村、2014）。認識論のレベルで大きく立場を異にする中で、データの扱いに関してなぜこうした共通性がみられるのかは今後検討に値するテーマであろう。システマティックなコーディング方法を重視するか、ブラックボックスに見られようが解釈を行う人間に一定の自由度を置くかの違いはあると考えられるが、M-GTAはどちらに対しても批判的な立場から、両者を統合化した分析方法を提案する。原理的に異なるものを統合化するなどそもそも不可能ではないかと思われるであろうが、客観主義や社会構成主義の一方に分極するのではなく、いわば第三の地点からそれに挑戦したのでありその成否はM-GTAを理解したうえでそれぞれの人の判断に委ねられている。

Ⅷ. M-GTAの分析方法

ここまでの論考を踏まえ、M-GTAの分析方法を概略的に述べていこう。【研究する人間】についてはすでに説明しているので省く。

１．分析テーマと分析焦点者の設定

M-GTAでは、分析テーマと分析焦点者の２点からデータを分析する。これは、データとの最初の接点に始まり、分析が終了するまで一貫する。分析テーマとはその分析において明らかにしようとする問いにあたるもので、データ収集前ではインタビュー・ガイド作成に反映され、分析に入るときにデータ全体をみて確認を行い、必要に応じて修正する。例えば、高齢夫婦世帯における夫による妻の介護プロセス（木下、2007､2009）といった､平易な言葉でゆるやかに設定し、目標とする理論（説明モデル）はプロセス性を説明するものであることを確認するために「プロセス」の言葉をつけるとよい。

分析焦点者とは、インタビュー調査であればその対象者を限定した集団として設定する。同じ例では、高齢夫婦世帯において「要介護状態の妻を介護している夫」となる。

注意が必要なのは、分析焦点者とは実際にインタビューに応じてくれるＡさんとかＢさんという特定個人を指すのではなく、研究計画から規定される抽象的集団である。データをみていくときに、分析焦点者にとってはどういう意味になるのかという視点を導入し、行為や認識、それらに影響を与えそうな背景要因や条件などに照らして解釈を試みる。分析者である自分自身が分析焦点者という視点を経由してデータをみていく。

分析焦点者を設定するメリットは３点挙げられる。生成する概念がだいたい一定水準に収まってくること。また、他の人が分析結果であるグラウンデッド・セオリーを理解しやすいこと。そして、特定の人間の視点からになるので、理解しやすいだけでなく結果を実践に活かしやすい。M-GTAを用いる研究は比較的限られた現実場面を対象とし、そこに登場する人間も実際には限られてくるし、とりわけヒューマンサービス領域であれば役割関係もはっきりしている傾向がある。したがって、その中のひとりに対応して分析焦点者が設定されれば、分析結果は他の関与者たちにとってもひとつのまとまりとして参考になるからである。つまり、高齢夫婦世帯における介護者である夫を分析焦点者とする研究は、ホームヘルパー、ケアマネジャー、訪問看護師などその状況にかかわる他の人たちにとっても理解しやすいものとなる。

２．分析ワークシートによる概念生成

最も基礎作業であるデータから概念を生成するために、分析ワークシートと呼ぶフォーマットを用いる。データの分析は、分析テーマと分析焦点者のふたつの視点からみていき、関連すると思われる個所に着目するところから始まる。最初ほどむずかしく感じるが、この２点に集中してみていくことが効果的である。その理由は、自分が収集したデータであってもディテールに富む内容なために読んでいて自分の関心があれこれ散弾銃的に反応するからである。それらをすべてラベルにして吐き出しそこからまとめていく方法もあるが、M-GTAでは問いとしての意義を確認した分析テーマと当事者の位置にある分析焦点者だけからデータをみることで文脈の理解を重視する。

生成するひとつの概念に対してひとつのワークシートを立ち上げる。したがって、最終的には概念の数だけワークシートも作成することになる。ワークシートは４つの欄から構成され、上から順に概念名、定義、具体例（ヴァリエーション）、理論的メモである。

ワークシートの立ち上げは､次のようになる。まず、ふたつの視点からデータをみていき関連すると思われ

る個所に着目する。これが分析上、データとの最初の接点になる。切片化ではないので、着目する範囲は意味内容により自分で判断する。そして、当該部分をコピー・ペーストしてワークシートの具体例の欄に貼り付ける。

具体例として抜き出した部分の解釈が絞れたら―最初はこの判断もなかなかしにくいのだが思い切って判断する必要がある―、その内容を簡潔な文章で定義欄に記入する。そして、定義をさらに凝縮した言葉を考え概念名の欄に書き入れる。

そして、データから抜き書きした部分の解釈を試みるときに、定義として採用する意味の他にいくつかの意味の可能性も検討し、また、関連していろいろな疑問、アイデアが出てくる。分析の初期段階ほどたくさんでてくるもので、それらを忘れないように理論的メモ欄に記録していく。記入のコツは、～はどうなのか、～だろうか、といった疑問形の短文にしておくことであり、分析を進めていく中で確認し潰してていく。

ワークシートを立ち上げると、今度は、その概念が果たして成立するかどうか、するのであればその完成度を高めていく作業となる。抜き書きした箇所から先に、他に類似の具体例がないかどうかをデータに探す。類似例はそれぞれ具体例の欄に追加していく。ワークシートの４つの欄の内、一番多くのスペースをとるのは具体例の欄で、その次が理論的メモ欄である。

概念の完成度を上げるために必要なもうひとつの作業が対極例の検討で、類似例ではなく、対極例がデータにみられるかどうかをチェックしていく。これは、自分の解釈が気づかないうちに恣意的に偏らないように対極例がありうるかどうかをデータに照らして確認する作業である。

ここまでがひとつのワークシートについての説明で、実際の分析ではワークシートをひとつ立ち上げるとその完成のために類似例、対極例の視点からデータをみていく。同時に、別の箇所に着目し、それをひとつの具体例とする二つ目の概念を生成するために二つ目のワークシートを立ち上げる。ワークシート２・概念２で、ワークシート１・概念１の場合と同様の作業で完成させていく。以後順次、ワークシート３・概念３へと続く。同時並行で、新たなワークシートを次々に立ち上げていく。そして、それぞれについてデータから類似例と対極例を探しながら自分の解釈した概念と定義で一定の多様な現象を説明できるかどうかを判断し完成させていく。

３．カテゴリーの生成

概念生成を始めると、概念の完成を見極めてからではなく早い段階から概念と概念を個別に比較検討し、複数の概念の関係を検討していく。この作業がカテゴリーの生成である。分析をまとめていくうえでカテゴリーの生成とカテゴリー相互の関係が決定的に重要となる。なぜなら、カテゴリーの関係が分析結果の骨格を構成することになるからである。個別の概念生成は分析ワークシートを活用して進めることができるが、概念と概念の関係は分析テーマと分析焦点者に照らして抽象度を挙げた検討作業となるので集中力が必要である。

M-GTAでは分析ワークシートとは別に、理論的メモノートをつける。これは分析の初めからつけ始めるのであるが、分析ワークシートの理論的メモ欄はそこで生成する概念に関してのメモであるのに対して、理論的メモノートは分析全体についてのメモで、概念間の関係の可能性についてもそこで記入していき、また、複数の概念の関係が考えられるとその意味とともにそれを図にもしていく。これがのちに結果図を構成するパーツとなる。

カテゴリーの生成については、後述する分析のまとめ方の図を参照されたい。

４．結果図とストーリーラインの作成：理論的飽和化の判断

GTAでは分析の終了を理論的飽和化と呼ばれる判断によって行うとされる。これは、データをみていっても具体例が追加されるだけで生成した概念の確認にはなるが、新たに重要な概念が生成されなくなった段階とされている。概念やカテゴリーが相互に関連づけられ論理的にまとまった段階、分析テーマで設定したプロセスが明らかになったときである。理論的飽和化をどのように活かすかはオリジナル版以降大きな課題であったのだが、M-GTAは独自に位置づけている。まず、分析ワークシートが十分に完成しているかどうか、つまり、個々の概念ごとに完成度をチェックする。これを、小さな飽和化と呼ぶ。次に、そうした概念の関係によって構成される全体のまとまり具合について、内容面からチェックする。つまり、分析テーマと分析焦点者からみて、設定した問いに対応して明確な結論が得られているかどうかを判断するのである。分析テーマをていねいに設定してあればこの判断はしやすくなる。

最後に、ストーリーラインと結果図についてであるが、分析が終了するためにはこのふたつの作業が必要である。結果図から説明すると、結果図を作成する目的は分析結果の全体を、それを構成する概念やカテゴリー相互の重要な関連性とともに示すためである。全体を視覚的に提示できるので、記述ではできない表現となり非常に有効なツールとなる。しかし、ただ図にすればよいのではなく目的を確認し、結果図で自分が説明したい内容を表わせているかどうかを吟味しないと、図によって見る側を混乱させかねない。

結果図といっても作成のプロセスがあり、分析の最後になってまとまった結果を図にするわけではない。とくに重要なのは、カテゴリーを生成していくときに概念間の関係を図にまとめていくことで、この一つひとつが最終的に結果図を構成するパーツになっていくということである。

さて、結果図が分析プロセスの中で継続して検討され最終的に完成されるのに対して、分析結果を概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化するストーリーラインは結果図の完成を待って行う。ストーリーラインは分析結果を簡潔に記述したものだが、そのポイントは記述の順序の判断にある。なぜなら、実際に論文で結果を書いていくときに、どの順序で何を書いていくのかというその記述の順序性がだいたいストーラインの記述によって確認できるからである。

結果図とストーリーラインによって分析結果を最終確認し、論文の記述に入る。

５．分析全体のまとめ方

図１は、生データ、概念生成、カテゴリー形成、明らかにしつつあるプロセスの４つのレベルを、抽象度に応じて分けたものである。M-GTAでは継続的比較を多重的同時並行の比較作業として進めるが、イメージ的にはそれぞれのレベルで横方向での比較と、４つのレベルの縦方向への比較の立体的組み合わせで進める。分析の大きな流れで言うと、この両方向での比較によりオープン化から収束化へと向かう。

この中で、概念生成とカテゴリー生成の関係であるが、データに対して概念の完成度を上げていく作業を一方でしながら、同時に概念相互の関係を検討する。図では、概念１と概念３と概念４が関係していて、このうちの概念３はそのままカテゴリー１に移行し、概念１と概念４がそれを構成する場合を示している。概念間の関係からカテゴリー１を形成するということ、また、生成中の概念には意味の範囲に関してバラツキがでること、カテゴリー２も複数の概念の関係から形成されることを示している。

そして、カテゴリー相互の関係から分析テーマで設定したプロセスを説明する。これが理論(説明モデル)になるのだが、分析焦点者という人間が組み込まれているので通常はこの理論は社会的相互作用を説明するものとなる。それにより､提示されるグラウンデッド･セオリーは説明と予測において有効であり、したがって、実践への応用力をもてるという判断に立つからである。

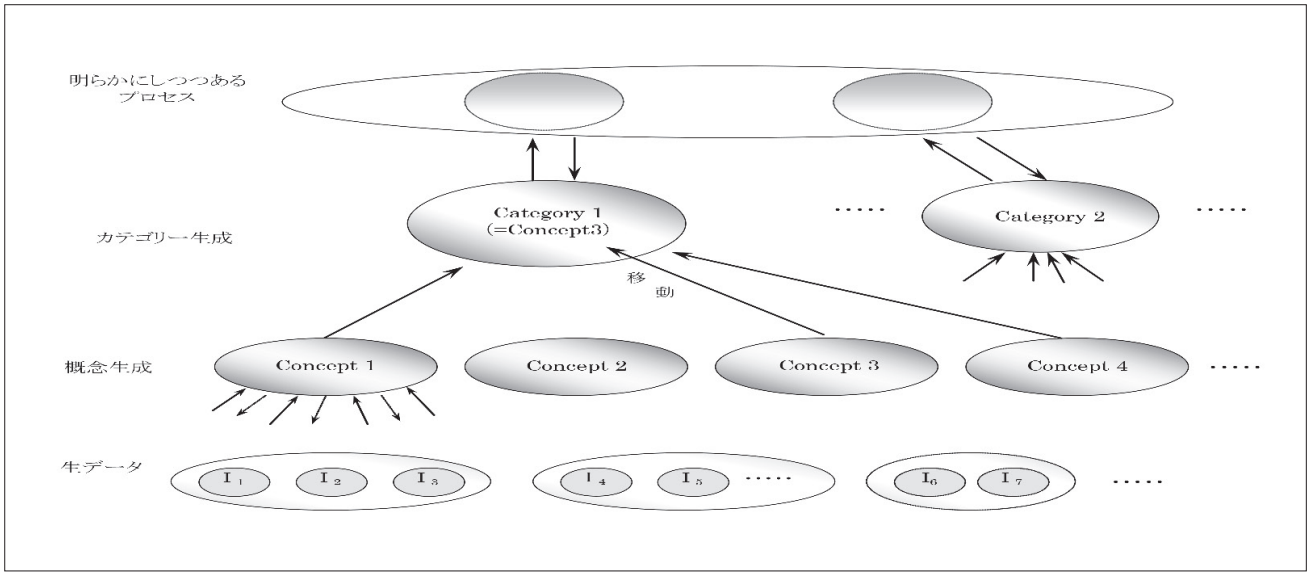

図１　分析のまとめ方（木下、2007、2009）

引用文献

Chamarz, Kathy：Constructing Grounded Theory：A Practical Guide Through Qualitative Analysis. SAGE Publications.（＝2008, 抱井尚子・末田清子(監訳)『グラウンデッド・セオリーの構築：社会構成主義からの挑戦』ナカニシヤ出版.), 2006.

Glaser, Barney and Anselm Strauss：Awareness of Dying. New York：Aldine Publishing Company.（＝1988, 木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護：死の認識と終末期ケア』医学書院.), 1965.

Glaser, Barney and Anselm Strauss：The Discovery of Grounded Theory：Strategies for Qualitative Research. New York：Aldine Publishing Company.（＝1996, 後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳『データ対話型理論の発見』新曜社.), 1967.

木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生, 弘文堂, 1999.

木下康仁： グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い, 弘文堂, 2003.

木下康仁：ライブ講義M-GTA：実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂, 2007.

木下康仁：質的研究と記述の厚み：M-GTA・事例・エスノグラフィー , 弘文堂, 2009.

木下康仁：グラウンデッド・セオリー論, 弘文堂, 2014.

松葉祥一, 西村ユミ(編)：現象学的看護研究：理論と分析の実際, 医学書院, 2014.

内山研一：現場の学としてのアクションリサーチ－ソフトシステム方法論の日本的再構築, 白桃書房, 2007.

Feature Article

Abstract

Basic Characteristics of M-GTA and its Analytical Process：
Renewing Possibilities of Qualitative Research

This paper discusses renewed possibilities of qualitative research, which is now being widely accepted as a research approach. Qualitative research is said to have emerged as an independent field in the early 1990s, transcending various human service disciplines. There were two contrasting streams of thought on research behind its emergence: the search for effective research methods to understand people with complex experiences, and a self-reflective attitude on hitherto unequal research relationships. The paper further discusses the tension-ridden interaction between the emerging qualitative research and the Grounded Theory Approach as proposed in the 1960s and goes on to examine basic characteristics of M (odified)-GTA and its analytical process. M-GTA has been substantially restructured from the original GTA in order to revitalize the possibilities of the original version while integrating possibilities and tasks of both Glaser's and Strauss's contributions.

Key words：qualitative research, renewed possibilities, original GTA, M-GTA

KINOSHITA Yasuhito